

「うつぼ物語」童話化の試み (二)

本 田 和 子

としかげさんとふしぎな琴

ある春の日のこと、としかげさんがいつものようにお琴をひいておりますと、どこからかふしぎな物音が聞こえてきました。

「コーンコーンコーンコーン」それは木を切りたおしている音のように聞こえますが、としかげさんのひくお琴の音に、それはそれはよく合って、とてもきれいにひびきます。

「コロリンシャンコロリン」とお琴が鳴れば、

「コーンコーンコーン」とふしぎな物音。

としかげさんは耳を傾けました。

「何といういい音を出す木なんだろう。あの木でもってお琴を作ったらば、きつとすばらしいきれいな音色のお琴ができるにちがいない。」としかげさんはそう思うと、もうじつとしていられません。さっそく、ふしぎな音をたずねて旅に出ることにしました。

「一体あの音はどっちから聞こえてくるのでしょうか。」としかげさん

は近くの山にのぼって見ました。すると、むこうの方に、天にまでとどきそうな高い山が雲に包まれてそびえています。

「コーンコーンコーン」ふしぎな物音はどうやらその山の方からひびいてくるようです。としかげさんはその山をめざして出発しました。

川を渡ったり丘を越えたり、広いひろい野原を横切ったり、としかげさんは一生懸命に歩きました。ふしぎな音のする方へ、あの高い山の方へ、走るようにしていそいだのです。

とうとう山のもともまでやってきました。ああ、一体これは何でしょう。ここは一体どこなのでしょう。としかげさんはゾッと身体中が冷くなるほどの恐しさを感じて、立ち止まりました。だって、そこには、はりがねのような髪の毛をして、真赤な顔に金のまりのような眼をきらきらさせた大男が、鍬のような大きな手足で、一生懸命に一本の大きな木を切りたおしているのです。その木というのが、またたいへんなものでした。山の向こう側の深いふかい谷

「底に根をはって、すくすくと伸びしげり、その一番上は雲にかくれて見えません。その枝は、となりの国までとどいているようです。そして、その木のがんじょうなことといったら、大男が汗まみれになって斧をふるっても、ほんの少ししかきりこむことが出来ないのです。」

「ああ、たいへんな所へ来てしまった。私は一体どうなるんだろう。」としかげさんは恐しさとおどろきでガタガタふるえながら、こう思いました。と、その時、大男はふと手を休めてこちらを向きました。

「おやおや、こんな所にいるのは誰だ、お前は何者だ。」大男もたいへんびびくりしたようです。大きな眼を自転車車の車輪かなにかのようにくるくる廻しながら叫びました。

としかげさんは覚悟をきめました。遠い日本の国からやってきて、お琴の勉強をしているのですもの、どんなことがあったって、せつかくここまでやってきて、この木をひとときれももらわずにかえるなんてことは出来やしません。としかげさんは心を静めて言いました。

「私は日本の国から来たとしかげです。この木の片はしをいただいとお琴を作りたいと思つて、はるばるやってまいりました。どうか小さなお琴を作るだけこの木をわけて下さいませんか。」

大男はますますその目を大きくし、その顔を火のように赤くしました。

「そんなことを言つてもだめだ。この木は私のものじゃなくて、天女の植えた木なのだから。私は今まで、この木の番人をしてほしい」

に守つてきた。今日はやっと、天女から木を切るようにと言いつけられて、長い間だいに番をして育てたこの大木を、切りたおしはじめたところなのだ。私だつて、この木を好きなように自分のものにする事なんて出来ないのに、ビョイとどこからかやってきたお前なんか、この木をわけてなんてやれるものか。」

そして、大男は大声でどなりました。

「ざっざとかえれ。かえらないと一のみにのんでしまふぞ。」

と、その時、あたりが急に真暗になりました。「ザザッザザッ」と、たいへんなどしどし降ります。「ピカッピカピカ」真暗な空を真二つに分けるように金色のいなすまが光りました。

そして、ああ、あれは何でしょう。真黒な空から、今、まっしぐらに降りてきたものは。

それは大きな竜にまたがった一人の小さな男の子でした。男の子は、驚きあわてている大男に、金色のピカピカ光るふだを一枚渡すと、アツという間に、また暗い空にかけのぼって消えていきました。金のふだには、美しい字で「この木は、日本のとしかげのものである」と書かれてありました。

としかげさんは、その木で立派なお琴を三十造りました。お琴を造る時は、天から子どもが降りて来てお手伝いしてくれましたので、すばらしいお琴が、出来上つたのです。

としかげさんは、さっそくこのお琴をひいてみようと思ひました。向こうの森の中で、ひとり静かにひいてみましょう。でも、何

しろ三十のお琴ですから、運んで行くのがたいへんですね。ところが、その時、天からやさしい風がスーッと吹いて来ました。おやおや、三十のお琴はフワーツとその風にのって、舞い上ったではありませんか。そして、向こうの森の方へスーッととんでいきます。としかげさんも急いであとを追いかけてました。

としかげさんは、静かな涼しい森の中に、ひとり坐りました。さあ、思いつきり、ここでこのお琴をひいてみましょう。どんな音がするのでしょうかね。

「コロリンコロリンシャン。」まあ何というやさしい音でしょう。その次はどうでしょうね。

「コロリンコロリンシャン。」これもやさしいやさしい音です。

三十のお琴のうち、二十八は同じようにやさしい音がしました。

そして、二つだけが、まあ何というすばらしい音でしょう。

「コロリンコロリンコロリン。」と玉をころがすようなひびき、

そして、そのお琴があたりにひびくと、まわりの木も草も、山や谷までがいっしょになって、何ともいえないひびきをたてるのです。

そして、そのひびきが、しずかにしずかに消えていくと、心の中がすつきりとして、本当にきよらかな気持になるのです。

としかげさんは、毎日毎日ひとりで一生懸命にお琴をひきました。二十八のお琴はいつもやさしく、そして二つのお琴はいつもふしぎなくらいきよらかに美しく聞こえました。

ある春の日、としかげさんは、森の向こうに、花のいっぱい咲いた野原のあるのに気がつきました。ぼかぼかといってお天気です。今日はひとつお花の中でこのお琴をひいてみましょう。

まわりの山々は、春のかすみにけむるように包まれ、森には新しい木の芽がやわらかい緑色の姿を見せています。一面に咲いた白や黄色の野原の花の上に、お日さまがにこにこ照って、夢のような春の日です。としかげさんは、あの美しい二つのお琴をひきました。花たちも、森の木も、まわりの山々まで、耳をかたむけてお琴の音に聞き入り、時にはそっとそれに合わせて歌を歌ってくれるようです。としかげさんはすっかり楽しくなって、何もかも忘れてお琴をひき続けました。

すると、天から何とも言えないふしぎな音楽が聞こえてきて、紫の雲が静かにしずかにとしかげさんの方に向かって降りてきました。その雲の上には美しい天女が七人、手をとりあって立っているではありませんか。としかげさんはびっくりして、お琴をやめ、ていねいにおじぎをしました。

「あなたは誰ですか。こは私たちが、春になると花を見ようと思いい秋になるともみじを見るために、天から降りてくる所なんですよ。」花の上に降り立った天女は美しい声でふしぎそうにたずねました。

「鳥もけものも住んでいない淋しい所に、よくひとりで住んでいまずことね。」ともう一人の天女も首をかしげます。

「ああ、もしかしたら、この人は向こうの山の大きな木でお琴を造

った人ではないでしょうか。」と、別の天女が言いました。

「そうですそうです。天のお使いからあの木をいただいたて、お琴を造った日本のとしかげです。」

「まあ、それならば、あなたはここでひとりで、お琴をひいていてもよかったですよ。ほかの人が誰も聞いていませんし、ちょうどよかったです。」もう一人の天女がうれしそうに言うのと、七人が顔を見合わせて、にっこり笑い合いました。

そして、別の天女がやさしくたのみました。「さあ、私たちにお琴をひいてきかせて下さいな。」

としかげさんは、あの二つの琴を並べました。七人の天女たちは楽しそうに手を取り合って耳を傾けています。どんなにかして、この天女たちを喜ばせてあげたいと、としかげさんは一生懸命でした。

「コロコロコロンコロン」お琴の音はいつもより、もっともっと美しく、春風のようにやさしくひびいていきました。

「この人は、世界中で一番上手にお琴をひける人です。でも、西のお山に住んでいる七人の先生に教わったら、もっともっと上手になることでしょう。」六人目の天女が言いますと、七人目の天女が一歩前に進み出てやさしくとしかげさんの手をとりました。

「西の山に住んでいる七人の人は、私たちが天の上で音楽をしたり踊ったりする時、それに合わせてお琴をひく人です。そこへ行っていろいろなひきかたを覚えてから、おくにへおかえりなさい。あなたのひくお琴の音が天の上までいつも美しくひびいたら、私たちは

どんなにか楽しいことでしょう。お琴をひくたびに、私たちのことを思い出して下さいね。」

としかげさんは、天女の言いつけどおりに西の山へ行くことにいたしました。また、いつかのようにスーッと風が吹いてきて、お琴をはこんでくれました。

少し歩いた所に、大きな川が流れています。どこにも橋がかかっていませので、どうして渡りましょうかと、としかげさんは首をかしげました。お琴の方は、風に運ばれて、フワッと向こう岸に渡ってしまいました。やれやれ困りましたね。

その時、一羽の大きなくじゃくが出てきて羽をひろげました。川の上いっばいに美しい羽を大きく大きくひろげました。

「ああ、ありがとう。」としかげさんは羽の上を渡って向こう岸へ着きました。

少し行くと大きな谷がありました。どうやって向こう岸に行きましようか。お琴は、フワッと風に運ばれて向こう岸に着いてしまいました。

おやおや谷底から大きな象のそのそと出てきましたよ。長い鼻をニューッと向こう岸までのばしました。

「ああそうか。橋をかけてくれたんですね。どうもどうもありがとうございます。」

また行くと、暗い暗い森がどこまでも続いています。お琴はフワッと風に運ばれて、森を越えて行きます。何とまた真暗な森で

しよう。道を間違えずに行けるでしょうかと、としかげさんが少し心配になっておりますと、中から出てきたのは、白いおひげのやさしそうなおじいさん。「こちらへいらっしやい。」と手をとって、暗い道を上手に向こう側まで連れて行ってくれました。

暗い森の向こう側は、やわらかに日が照って、静かな風が吹いております。そして、お母様の眉のようにやさしいふくらとした山が七つ並んでおりました。

第一の山にとしかげさんのほりました。静かにしずかに眠っているような草や木を驚かせないように、足音に気をつけてのぼりました。山のとっぺんには、大きな梅の木が一本、真白な花を咲かせています。いいにおいが、あたりいっぱいになっています。そして、その下に水色の着物を着た男の人が、静かに坐っていました。

としかげさんはそっと近寄って、ごあいさつをしました。

「今日は。」

「おやおや、これはこれは、あなたはいったいどなたですか。」

「日本のとしかげです。天女に教えられてまいりました。」

「それはまあ、それでは森の向こうの、谷の向こうの、そして大きな向こうの、花園からおおいでになったのですね。よくいらっしやいました。」

そこへ、風に運ばれてお琴がスーッとやってきました。そして、二人の前にそっと並びました。

「これは、あなたのお琴ですか。どれ、ちょっとだけ鳴らさせて下

さい。」その人は真白なほっそりした指で、ちょっとお琴の糸をばじきました。「ココロコロリンココロリン。」

まあ何という音でしょう。眠ったように静かだった草も木も、そして、向こうに続く六つの山までが、あまりきれいな音に、びつくりして目を覚ましたようです。

「おお、何とすばらしい音でしょう。向こうの山の人たちにも聞かせてやりたい。」

としかげさんと、その人は手を取り合って第二の山にのぼりました。第二の山にも同じように梅の花が真盛りでした。そして、その下にやはり水色の着物を着たやさしそうな男の人がひとり坐っております。

「おやまあ、珍しいお客様ですね。どんな御用でしょうか。」

「向こうの花園から、天女に教えられて来た、日本のとしかげさんという人です。とてもすばらしいお琴を持っていますので、いっしょにひいてみようと思うのです。」第一の山の人がそう言いました。

「それはそれは嬉しいこと、じゃあ、向こうの山の人たちも皆いっしょに集まりましょうよ。」

三人はいっしょに第三の山にのぼりました。第三の山の人も喜んでいっしょになりました。

こんどは四人で第四の山にのぼり、第四の山の人を誘いました。

第五の山、第六の山をたずねて、七人になりました。こんどはいよいよおしまいの第七の山です。

この山は、今までの山と少しちがうようです。地面が見えないくらいに紫に光る小さな石がいっぱい並び、木々は皆、緑の葉の間から黄色い小さな花をのぞかせています。山全体に、その花がよくおついで、所々にくじゃくが遊んでいました。

山のとっぺんには、やはり大きな梅の木が一本立っていました。大きな大きな梅の木です。その枝はあたりにずしとひろがって、ちょうどその下は傘の下のように、空もよく見えないようでした。そして、その梅の木には真赤な花がいっぱいに咲いていました。下に坐つた男の人は、真白な着物でした。少し上を向いたその顔も、着ている着物も、梅の花の色がうつってぼーっとす赤く見えるようでした。「まあまあ皆様おそろいでよくいらっしゃいました。珍しいお客様ですこと。」

「うつば物語俊蔭の巻」の一部を二つの物語に童話化してみた。後者は、長さもことばづかひも、物語のもつ雰囲気も、年長児以外には無理であろう。お話を聞くことを好み、聞く態度のできている五才児級なら、じゅうぶんに楽しみ、味わうことができると思われる。

「幼児の教育」四月号に大熊米子氏が、うつば物語よりヒントを得て作られた「ピー

水色の着物の六人の人も、としかげさんも皆、赤い梅の花の下に坐りました。皆に、梅の花の色がうつって、顔も着物も、うす赤く見えます。いいにおい。やわらかい風が時々八人の間を吹いて過ぎます。としかげさんは、七人の人にかこまれて、あの二つのお琴をひきました。心を静かに落ちつけて、ただそのお琴が七人の人を喜ばせるようにとそれだけを考へてひくとしかげさんの姿は、本当に愛らしく見えました。七人の人たちは、皆、顔を見合せてはニコリ笑い合い、うなずき合いました。こんな人になら、自分たちの知っているだけのお琴を教へてあげたいと、心の中で思つたのでしよう。梅の花がときどき、チラリチラリと散つて、としかげさんの髪にも、七人の人たちの水色や白の着物の肩にも、可愛らしくとまりました。

(第二話完)

★

の笛」を發表されているが、古物語から素材だけを拾ひ出して、まったくの子どもの世界の住人たるフレッシュな愛らしい物語を作り出されていることに感心し、興味深く拝見した。自由に、物語にとらわれることなく、その中から童話的な素材だけをとり出して、想像と独創の翼を自在にひろげて物語を創作していくことも一つのいきかたであろう。

★

それに反して、ここでの試みは明らかに原文にとらわれたいきかたである。原文のもつ素材で、何か大どきな神仙めいた味わいと、その世界を子どもの中に再現してみたいと思つたからである。

私どもの祖先が産み出し、年月の波をくぐって愛され伝えられてきた古物語を、童話として幼い人たちに伝える一つの試みとして、お読みいただければ幸である。